



金澤麻由子もまた、ステップスギャラリーで確実に展覧会をこなしている。金澤は今回、「コミュニケーションする絵画」と題して、観客がモニターを通じて話しかけると自らのキャラクターである《ポワン》が応えるインタラクティブ・ビデオ・アートの作品と絵本の原画を画廊内に、小品を事務所に展示した。

インタラクティブ・ビデオ・アート作品は非常にユニークだ。モニターを覗き込むと顔認識がされ、この認識と声によって《ポワン》が応えてくれるのだが、必ずしも上手くいかないところが面白い。最近のインタラクティブ・アートは反応が良過ぎて、まるでゲームである。予め仕込まれた装置が稼動するようなものではない点を楽しめた。

事務所に展示された小品は様々な技法と素材によって可愛いバグが描かれているので、飽きることがない。金澤はメディア・アーティストであり、イラストレーター扱いされることがあっても絵画として成立している。

絵本の原画は前回同様、見る者に夢を与えてくれる。読書の衰退が嘆かれる中、絵本は元気である。私はこの原稿を書いている段階で5歳と1歳の子供がいるので、本屋に行くとき絵本コーナーに立ち寄りが多い。古典は勿論、昔ながらの手描きの絵本が新たに数多く出版されている。子供に絵本を薦めるなら、大人も本を読んで欲しい限りだ。金澤の絵本もまた、古典的物語と手描きの要素に満ち溢れている。絵本とは現実を突きつくと共に、想像力を掻き立てなければならぬ。あれは何だろう。これはどうだろう。次はどうなるのだろう。そのような、未来を探す姿が金澤の絵本には込められている。《ポワン》の微細な表情が魅力的である。

それにしても今回の《ポワン》から、私は琳派や円山派といった、日本の古典的絵画を想起したのであった。それを金澤がどれだけ意識したのかは分からないが、金澤が様々なイメージを学んでることは確かであろう。

